

# 香川の医療最前線

663

四国こどもとおとなの医療センター  
小児科医長 岡田隆文氏



●おかだ・たかふみ 2003年徳島大医学部卒。同大大学院東京医療センターなどを経て、13年1月から香川小児病院(現四国こどもとおとなの医療センター)。20年4月から現職。日本小児科学会専門医・指導医、感染症学会専門医・指導医、小児感染症学会認定医、抗菌化学療法学会指導医。普通寺市出身。43歳。

抗生物質(抗菌薬)の不適切な使用が一因となり、薬剤が効かなくなる薬剤耐性菌が世界的に増加している。2019年に岡山市で開かれた20カ国・地域(G20)保健相会合の宣言でも薬剤耐性対策の具体的な内容が盛り込まれた。四国こどもとおとなの医療センター小児科の岡田隆文医長に薬剤耐性菌がもたらす影響や同科で行っている対策などについて聞いた。

抗菌薬は細菌性の感染症の治療に使用する化学物質で、代表的なものにペニシリンやセフェムなどがあ

## 薬剤耐性菌対策

る。だが、これら抗菌薬を不必要に投与し続けると、薬への耐性を持ったメチシリン耐性黄色ブドウ球菌や

人が死亡するとの予測もある。耐性菌を保菌している人がある。耐性菌を保有している人がある。耐性菌を保有している人がある。

## 抗菌薬の適切な使用を

### 取り置きや譲渡避ける

カルパペネム耐性腸内細菌科細菌といった薬剤耐性菌

が保菌していると必ず影響が出るわけではない。ただ、

ら、年に10回風邪をひくといわれている。抗菌薬は細菌性感染症に効果的なため、

を發揮できなくなる。世界で耐性菌による感染症で死亡する人は年間70万人とさ

れる。耐性菌により抗菌薬が効きにくくなること

で、今までは抗菌薬を投与

った場合、50年には1千万

が、今までは抗菌薬を投与

が、今までは抗菌薬を投与

が、今までは抗菌薬を投与

が、今までは抗菌薬を投与

が、今までは抗菌薬を投与

### G20での宣言のポイント

- ◆ 国連加盟国や国際組織と協力して対策に取り組む
- ◆ 薬剤耐性菌による感染症の発症予防のためワクチン提供などの施策を強化する
- ◆ 人の健康と動植物や環境の健全性を同時に保つ「ワンヘルス」の考え方に基いて行動計画を策定する

小児科で行っている抗菌薬の適切な使用に向けた

取り置きや譲渡は、専門の医師や看護師らでつくる抗菌薬適正使用支援チームがあり、センターで扱った薬剤の種類を削減などを行っている。さらに、同チームが作成した抗菌薬と耐性菌について解説するチラシをセンター内で配布している。このほか、抗菌薬が必要でない感染症を発症した子どもに対し、投与するよう親から求められた場合も、丁寧に必要でない理由を説明している。今後とも取り組みを続けることで、抗菌薬の適切使用の動きが地域に波及していけばと考えている。

**■ 四国こどもとおとなの医療センター小児科**  
 小児感染免疫、小児呼吸器・アレルギー、小児循環器など幅広く対応。各分野の専門医が診療にあたっている。  
 所在地：善通寺市仙遊町2-1-1  
 電話：0877 (62) 1000  
[https://shikoku-mc.hosp.go.jp/section/c\\_infant.html](https://shikoku-mc.hosp.go.jp/section/c_infant.html)